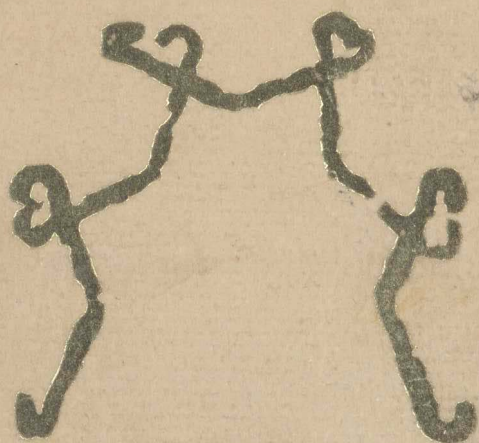






現代の女性作家

曾野綾子の自選作品

制作 創造集団

発行 二見書房

曾野綾子の自選作品〈現代の女性作家〉 昭
 和四十六年二月二十八日初版発行 著者曾野
 綾子 製作創造集団 印刷堀内印刷所 製本
 徳住製本所 発行二見書房 東京都千代田区
 三崎町二―一八―二 電話(二六三―〇〇三
 四) 振替口座東京二六三九番 定価七五〇円

《検印廃止》

目 次

みじかい小説

殉死

7

鸚哥とクリスマス

13

海の御墓

29

硝子の悪戯

47

身欠きにしん

59

火と夕陽

69

青巖寺風景

85

海の見える芝生で

97

金沢八景

177

夜間標識

133

只見川

149

高森ホテル

163

ながい小説

弥勒

171

曾野綾子の「慎しみ」

福田宏年

283

あとがき

286

造本
芝本善彦

曾野綾子の自選作品

殉死

Y市では、毎年一回、旧藩時代の上級武士たちの末裔^{まうがい}が集る会があるとかで、たまたま私たち作家のグループが講演会の後で招かれたのも、丁度、その集りの日にぶつかったからであつた。

東北の夏は暑い。藩主の邸は、今、市の公民館になつていたが、一部は昔のままに保存されており、その御殿の大広間に、昔の家臣たちが、禄高、現在の社会的地位、年齢、そのような会を続けて行くことに對する熱心の度合などを加味した独特の席順で並んでいた。

最上座に坐^{すわ}っているのは、元家老の家柄で、有名な製鉄会社の社長として財界でも名の通った人物であつた。総じて中年以後の人々が多いのも、会の保守的な性質上、やむを得ないことであろう。私はかなり非常識な人間だと常日頃思^{ごころ}つてはいたが、今こうして、人々が歴史と現在の権勢とを二つながら、き

っかりと身におびて坐^{すわ}っているのを見ると、私は、そのような社会の通念を信じることに、一つの優しさを感じるようになった。

たとえば、この御家老の家柄に生まれた堂々たる紳士は、自他共に許す財界の実力者だからよかつたようなものの、もしかりにこれが落ちふれて、ストリップ劇場の雑役か何かになつていたら、（私としては別にストリップ劇場の雑役が卑しい仕事だというふうには思わないのだが）全く皆、その男をどの席に坐^{すわ}らせたらいいかということであつてしまふだろう。皆にそのような困惑を与えないためだけに、なるほど家老の家に生まれた人は、その家名に對してふさわしい社会的地位を得ようと心がけるようになる訳だ。

家臣たちの中には、昔二百石だつたという家柄の元陸軍中將や、三百五十石だという牧場主などがいた。そして末席の方に

は、元藩医の家柄だという、この町の有名な病院長が坐っていた。

私が特にこの人物に注意をひかれたのは、彼が年齢不明の雰^{ふん}囲^い気^きを持っていたからかも知れなかった。

徳久重志郎というその人物は、遠目には、六十過ぎの純白の髪をしていたが、後で私のところあたりまで、お銚子をもって酌^{しやく}をしに廻^{まわ}って来た時の様子では、まだ四十少し過ぎで、私とはそれほど年齢もへだたてはいなそうであった。彼は慎しく微笑^{えいごう}しては見せたが、昨日や今日会った他人には、めったなことでも心を許^{ゆる}しやうにない冷酷さのようなものが、眼鏡の奥の眼差しに潜^{ひそ}んでいた。一口で言えば、彼はなかなかの、美しい中年男と言うべきであった。

「それだけ何代もお続きになったお家柄ですと、お子さんも、お医者さまになられること以外お考えになりませんでしやうね」

私はそれを一般論として言ったのだったが、彼のすぐ隣にいたこの土地の銀行の支店長という人物が、すぐに代わって答えた。

「徳久さんのところは、子供さんが比較的遅くて、まだ小学校三年生の坊^{ぼく}ちゃんが一人だけなんですがね。これが大変な秀才でしてね。知能指数が、百七十とかだったでしやう」

徳久重志郎は改めて、穏やかな、決して相手に心情的にも巻^まきこまれていないことを示す微笑^{えいごう}を浮べた。

「あんなものは、それほど正確^{せうさく}じゃありませんからね、計り方にもよりますし、ちよいと馴^なれると子供の方もずるいもので、こつを覚えてうまくなるそうですよ」

徳久は低い声で否定して見せた。

「しかし、数学は現に天才的だというもっぱらの評判ですよ。代数なんかすらすらと解^とくというし……まだ小学校三年ですよ。代数の前に、昔は小学校五、六年頃、旅人算とか植木算とかやったでしやう。あれだつてむずかしくて、全く、私なんかお手上げたつたらね」

「頭の向きがあるんですよ」

徳久は言った。

「しかし、向きのないのが多すぎるからね。しかも、お父さんに似て鼻目秀麗^{しゅうれい}、背も高いと来てるから、国宝ものだよ、あという坊^{ぼく}ちゃんは」

「二十過ぎれば只^{ただ}のひと、の口でしやう。本を読むのだけが好きなだけなんです。小学校一、二年から、僕の本棚^{ほんだ}の医学書を読みましてね。不思議と何とか、ポイントをつかんでるんですよ。だから僕が医学的なことを女房に説明するよりも、息子にわからせる方が早いみたいところがあつてね。何にで

も、長時間、熱中できる、ということだけは強いんですね」

私はその雰囲気から、歴代の藩医の跡とり息子が、りりしい美少年で、考え深く勉強好きであり、しかも類稀な素質を持っているということは当然のような気分になりかけていたのだった。

私はその日、Y市の郷土料理のおいしさにびっくりした。山菜、身欠きにしんや干鰯のこつてりした煮もの、それから神戸や松阪牛にも匹敵する上等の牛肉。

暑い日だったにも拘らず、その宴がさわやかに思えたのは、芸者が入らなかつたからかも知れない。Y藩には質実な気風があつて、町中「遊女、野郎」は置かない規則が昔からあるのである。

「市内には、今でも芸者はおりません」

という説明で、お料理は、素朴な和服の女中さんたちが運んで来てくれるだけである。

「こんな見事な牛肉が、有名にならないのはおかしいですね」と私は言った。

「全くそうなんです、我々は宣伝が下手で、一番いい肉には、松阪とか神戸とかいうハンコ押して出しますのでねえ。そういうことじゃいかんですが、まあ、消費者の方々にも固定

観念がおありで、どっちもどっちです」

その翌日、出発までの短い時間に私は市内の武家邸の残っている静かな町並を見にでかけた。そして老杉に包まれた神々しい、藩主の菩提所へまいて帰りに、市の中心部を通りかかると白い鉄筋建ちの徳久病院が目についた。

「徳久氏は、薔薇作りも有名でしてね。私は薔薇のことはよくわかりませんが、時々東京の展覧会にも出品して賞を貰うらしいですよ。あの人にはスーパーマン的なところがありまして、バイオリンなんかも、プロ級の腕前なんです。楽器のいいのを持ってますしね」

案内の人が教えてくれた。

暑い夏の西陽が徳久病院の白壁を爽快に照らしつけていた。

それから二年ほど経った。

私は、会うほどの人々に、Y市へ行って、古い日本の町を再確認するように薦めましたが、自分が、そこを再訪する機会はなかつた。

只、或る日、私は羽田飛行場の待合室で、見知らぬ初老の男に声をかけられた。

見知らぬ、のではなかつた。私の方が覚えていなければならぬ筈の相手の顔を、いつもの例で忘れてしまっていただけの話

なのである。

「Y市の会のお目にかかりました」

品のいい紳士は、そう言って当惑している私を救ってくれた。そう言われて見れば、あのキラ星のように並んでいた家臣たちの中に、この人もいたように思われ、私はやっと安堵することができた。

「会はその後も続いていらっしやいますか」

「はあ、やっております。去年は作家のBさんが、又あちらで講演を下さいました」

私はふと、小気味いい迄のY市の暑さを思い出した。

「あの時、若白髪で、徳久という医者^{まへ}のいたのを覚えておられますか」

「はい、あの秀才のお子さんをお持ちだという……」

「あの男が、あの会のメンバーの中では一番若かったのですが、死にましてね、それだけが会員の中の大きな変化でした」

「御病気ですか？」

「いや、それが自殺なんです」

「何でまた……」

「例の秀才の子が、あの翌年、川で溺れて死んだんです。勿論一人っ子だったんだから、どんなにショックだったろうと、我我は気の毒に思っていた訳なんだが、それから三か月は両親と

も、ちゃんと生きていた。徳久氏は診療も普通にやりましてね、薔薇が好きだったんだが、薔薇の世話もして、立派に生きとりました。

ところが、十一月の末頃になりましてね。或る時、入院患者のひとりもない晩があった。前々から覚悟をして、そういうふうにしむけていたらしいんですよ。入院しなけりやならんような患者は、大学病院へ廻して、無責任にならんようにしておいて、その晩、決行したらしいんです。奥さんと二人、乃木大将夫妻の自決を見るようでした。もっとも死に方は違いますがね」

徳久重志郎は、妻にモヒの致死量をうち、それから、自分にも注射して死んだのだった。

「遺書は何もないんですが、看護婦たちにはきちんとして職金などを払うように指定がありましてね。患者たちのカルテも完璧に整理してあった。その中の何人かの分には、知人の大学病院の医者あての紹介状までついてました。

今、日本中に教育ママ、教育パパの溢れていると言っても、彼らほどのはいなかったんじゃないかな。秀才の息子が死んだんで、親が殉死したんですからな。

私はそれ以来、学校のことで騒いでいる親共を見ると言ってるんです。子供が死んだら自分も死ぬぐらいの気持があるな

ら騒いでもいいが、そうでないのなら、やめろ、とね」

これは、徳久夫妻が最初ではない、と私は思った。中世のヴェネツィアでは、神童が死ぬと、父も母も姉妹たちも次々と自殺したのだ。

「病院は？」

「今、封鎖してあります。市で買いとるというような話も出ますが、バラも殆んど枯れましてね」

私の目には荒れた病院の庭をうつ真夏の陽が、再びきらめいて見えるのだった。

(昭和四十五年)

鵲哥とクリスマス

「Ein König hatte eine Tochter, die war über alle Massen schön, aber dabei so stolz und übermütig……」

王様に娘がありました。彼女はどこからみても大変うつくしかったのですが、一方、氣位が高くて、尊大なところがありました……」

と彼は訳している。うつむいた私には、彼の鼻から上は見えないのだ。口許の線はいいのだけれど、齒がおそろしく汚い、真黄いろだ。そして時々、身ぶるいするような嫌な口臭がした。でも何にもまして、私はドイツ語の稽古そのものがいやだった。

私は未だ数え年で十三にしかならなかったけれど、ツルゲネフの小説に出て来るパザーロフという虚無的な青年を好きになつていたので、グリム童話の「つぐみひげの王様」の話などに、てんで興味が持てなかったのだ。

ああ、あのパザーロフって本当に素敵だ。チブス患者をみる

時に、手に怪我をして、そこから菌が入って死ぬんだ。彼は死ぬことをちゃんと知っている。あと何時間たったら意識が不明になるか、それまでじつと計っている。そこがほんとに好きだ、と私は空想する。

でも目の前にいる彼も、大学の医科へすすむと言っていただけ。私はお稽古を中断する恰好な話題を見つけたので、両手を拡げて何気なく本の上にのせてしまう。

「大学へ行くの？」と私は質問した。

「行きますよ」

「お医者さまになるの？」

「そのつもりです」

「何科のお医者さま？　ねえ、なるんだったら伝染病科のお医者さまになって」

「ばくは、人のあんまりやりたがらないような地味なものをや

るつもりです。小児科かなんかね」

私の期待は、ここで完全に裏切られる。私はしょんぼり肩をおとして、手を机の下に戻す。けれど彼がさあ先にすすみましよう、という前に何かしなければならぬ。そこで次に、私はふくら雀のようにふくふくに着こんだアンゴラのジャケツのポケットから、一羽の手のりのインコを掴み出すと、ドイツ語の本の上に置く。ピーチャンと呼ばれるその小桜インコは、目の下を爪で掻き、体中をふるふるわらせて羽根を逆立て、せわしなく尾羽を拡げて羽ばたきをする。ついでに、頁の上に、白と茶と緑の混った水気の多いものをぽつんと滴らす。こうなったらしめたものだ。私は椅子の上に立ち上って、大きな食卓用のテーブルのむこう側に、お尻をふりながら歩いて行く。ピーチャンをつかまえてから、又彼に訊く。

「ピーチャンがアイスクリームたべるの知ってて？」

「知らない。小鳥はアイスクリームなんかたべないでしょう」

「それが食べるの。ピーチャンは、ピフテキだって塩辛だって何だって食べるのよ」

戸の隙間から、その時、ヒナドリをやく香ばしい匂いが流れ込んで来た。

一九四三年、クリスマスの宵のことであった。私はおけいこが終ってからの晩餐のことしか念頭になくなった。私はバザー

ロフに対する意識的な恋心はあっても食べざかりである。私の否応のない愛情の対象は、母とこのピーチャンだけであった。私はグリム童話の世界を馬鹿にして、将来、女間諜マタ・ハリのようになることを夢みていたけれど、髪を一人で結ったことがなかった。そしていくらませていたとはいえ、十三の私には、まだ、自分が知らぬ間に父母のはからいで、目の前にいる青年、当時浦高の理乙の学生だった奥田守と許婚者の間柄になっているとまでは、見ぬけなかったのである。

八年後の一九五一年のクリスマスの夜に、私は銀座四丁目の角で、冷たい夜の空気にふるえながら、彼を待っていた。彼とは無論、私の婚約者の奥田守である。

といっても、私は丁度一週間前に、彼の勤めている深川の方の、むかし施療病院だったところに彼を訪ねて、私達の婚約を解消して貰いたいと申し入れたばかりであった。

私達二人に限って何から何まで、どうしてこう変化しないものだろう、と私は思わずにいられない。戦争があったけれど、死にも傷つきもせず、彼は予定通り小児科の医者になった。相変らず黄色い歯で例のたまらない口臭を無邪気に吐きかけながら、彼は灰色になった診察着を着て、戸の外で泣きわめく患者達を気にかける風もなく、爪先の破れた運動靴で無細工につっ